

骨董

幸田露伴

青空文庫

骨董こつどうというのは元來しな支那の田舎言葉で、字はただその音おんを表わしているのみであるから、骨の字にも董の字にもかかわった義があるのではない。そこで、汨董と書かれることもあり、また古董と書かれることもある。字を仮りて音を伝えたまでであることは明らかだ。さてしかし骨董という音がどうして古物こぶつの義になるかという点、骨董は古銅こどうの音転おんてんである、という説がある。その説に従えば、骨董は初はじめは古銅器を指したもので、後に至つて玉石の器や書画の類まで、すべて古いものを称することになったのである。なるほど韓かん駒くんの詩の、「言う莫なかれ衲子のうしの籃らんに底無しと、江南こうなんの骨董を盛り取つて帰る」などという句を引いて講釈されると、そうかとも思われる。江南には銅器が多いからである。しかし骨董は果して古銅から来た語だろうか、聊いささか疑わしい。もし真しんに古銅からの音転なら、少しは骨董という語を用いる時に古銅という字が用いられることがありそうなものなのに、汨董だの古董だのという字がわざわざ代用されることがあつても、古銅という字は用いられていない。の古物をもいうことになったのである。骨董は古銅の音転などという解は、本を知らずして末に就いて巧解こうかいしたもので、少し手取り早過ぎた似而非解えせ釈という訳になる。

また、蘇東坡そとうばが種かの食物を雑まじえ煮にて、これを骨董羹こつとうかんといった。その骨董は零雑れいざつの義で、あたかも我邦俗わがほうぞくのゴツタ煮ゴツタ汁などというゴツタの意味に当る。それも字面じめんには別に義があるのではない。また、水に落つる声を骨董ひびきという。それもコトンと落ちる響ひびきを骨董の字音を仮りて現わしたまでで、字面に何の義もあるのではない。畢ひつきよう竟骨董はいずれも文字国の支那の文字であるが、文字の義からの文字ではなく、言語の音からの文字であつて、文字は仮りものであるから、それに訓詁的のむずかしい理屈はない。

そんな事はどうでもいいが、とにかくに骨董ということは、貴たつといものは周鼎漢彝しゅうていかんいぎよ玉器くきの類から、下つては竹木雜器に至るまでの間、書画ほうじよう法帖ほうじよう、琴劍鏡硯きんけんきようけん、陶磁とうじの類、何でも彼かでも古い物一切をいうことになっている。そして世におのずから骨董の好きな人があるので、骨董を売買するいわゆる骨董屋を生じ、骨董の目ききをする人、即ち鑑定家も出来、大は博物館、美術館から、小は古郵便券ふるゆうべんけん、マッチの貼紙の蒐集家まで、骨董畠とひが世界各国都鄙とひ到るところに開かれて存在しているようになっている。実におもしろい事で、また盛んなことで、有難い事で、意義ある事である。悪口をいえば骨董は死人の手て垢あかの附いた物ということで、余り心持の好いわけの物でもなく、大博物館だって盜賊どろぼうの手柄くらべを見るようなものだが、そんな阿房あはげた論をして見たところで、野暮はなしな談で世

間に通用しない。骨董が重んぜられ、骨董蒐集が行われるお蔭で、世界の文明史が血肉を具し脈絡が知れるに至るのであり、今までの光輝がわが曹そうの頭上にかがやき、香気が我らの胸に逼せまつて、そして今人こんじんをして古文明を味わわしめ、それからまた古人とは異なつた文明を開拓させるに至るのである。食欲色欲ばかりで生きている人間は、まだ犬猫なみの人間で、それらに満足し、若くはそれらを超越すれば、是非とも人間は骨董好きになる。いわば骨董が好きになつて、やつと人間並なみになつたので、豚だの牛だのは骨董を捻ひねくつた例を見せていない。骨董を捻ひねくり出すのは趣味性が長じて来たのである。それからまた骨董は証拠物件である。で、学者も学問の種類によつては、学問が深くなれば是非骨董の世に頭を突込つっこみ手を突込むようになる。イヤでも黴かびくさ臭いものを捻ひねくらなければ、いつも定まりきつた書物の中をウロツイている訳になるから、美術だの、歴史だの、文芸だの、その他いろいろの分科の学者たちも、ありふれた事は一通り知り尽して終しまつた段になると、いつか知らぬ間に研究が骨董的に入つて行く。それも道理千**万**な談はなしで、早い譬たとえが、誤植だらけの活版本でいくら万葉集を研究したからとて、真の研究が成立なりたとう訳はない理屈だから、どうも学科によつては骨董的になるのがホントで、ならぬのがウソか横着かだ。マアこんな意味合いみあいもあつて、骨董は誠に貴ぶべし、骨董好きになるのはむしろ誇るべし、骨董

を捻くる度にも至らぬ人間は犬猫牛豚同様、誠にハヤ未発達の慙むべきものであるといつてもよいのである。で、紳士たる以上はせめてムダ金の拾万両も棄てて、小町の真筆のあなめあなめの歌、孔子様の讃が金で書いてある顔回の瓢、耶蘇の血が染みている十字架の切れ端などというものを買込んで、どんなものだいと反身になるのもマンザラ悪くはあるまいかも知らぬ。

骨董いじりは実にオツである、イキである、おもしろいに違いない、高尚に違いない、そして有意義に違いない、そして場合によつては個人のため社会のためになる事もあるに違いない。自分なぞも資産家でさえあればきつとすばらしい贗物や贗筆を買込で大二コニコであるに疑いない。骨董を買う以上は贗物を買うまいなんぞというそんなケチな事でどうなるものか、古人も死馬の骨を千金で買うとさえいつてあるではないか。仇十州の贗筆は凡そ二十階級ぐらいあるという談だが、して見れば二十度贗筆を買いさえすれば卒業して真筆が手に入るのだから、何の訳はないことだ。何だって月謝を出さなければ物事はおぼえられない。贗物贗筆を買うのは月謝を出すのだから、少しも不当の事ではない。さて月謝を沢山出した挙句に、いよいよ真物真筆を大金で買う。嬉しいに違いない、自慢をしてもよいに違いない。嬉しがる、自慢をする。その大金は喜悦税だ、高慢税

だ。大金といったって、十円の蝦蟇口がまぐちから一円出すのはその人に取って大金だが、千万円ドルの弗箱から一万円出したって五万円出したって、比例をして見ればその人に取って実は大金ではない、些少さしょうの喜悦税、高慢税というべきものだ。そしてその高慢税は所得税などと違って、政府へ納められて盗賊役人どろぼうだかも知れない役人の月給などになるのではなく、直に骨董屋さんへ廻って世間に流通するのであるから、手取早く世間の融通を助けて、いくらか景気をよくしているのである。野暮でない、洒落切った税というもので、いやいや出す税や、督促を食った末に女房にようぼの帯を質屋へたたき込んで出す税とは訳が違う金なのだから、同じ税でも所得税などは、道成寺どうじょうじではないが、かねに恨うらみが数 ござる、思えばこのかね恨めしやの税で、こつちの高慢税の如きは、金と火花は飛出す時光る、火花のように美しい勢いきおいの好い税で、出す方も、ソレ五万両、やすいものだ、と欣 《にこにこ》として投出すなげだ、受取る方も、ハツ五万円、先ずこれ位のものをお納めして置きますれば私わたくしも鼻が高うございますと欣 《にこにこ》して受取る。悪い心持のする景色ではあるまい。誰だつて高慢税は出したかろうではないか。自分も高慢税は沢山出したい。が、不埒ふたち千万、人生五十年過ぎてもまだ滞納とは怪けしからぬものだ。

この高慢税を納めさせることをチャンと合点がてんしていたのは豊臣秀吉とよとみひでよしで、何といつて

も洒落^{しやれ}た人だ。東山^{ひがしやま} 時分から高慢税を出すことが行われ出したが、初めは銀閣金閣の主人みずから税を出していたのだ。まことに殊勝の心がけの人だった。信長^{のぶなが}の時になると、もう信長は臣下の手柄勲功を高慢税額に引直^{ひきなお}して、いわゆる骨董を有難く頂戴させている。羽柴筑前守^{はしばらくぜんのかみ}なども戦^{いくさ}をして手柄を立てる、その勲功の報酬の一部として茶器を頂戴している。つまり五万両なら五万両に相当する勲功を立てた時に、五万両の代りに茶器を戴いているのである。その骨董に当時五万両の価値があれば、そういう骨董を頂戴したのはつまり筑前守は五万両の高慢税を出して喜んでそれを買ったのと同じことである。秀吉が筑前守時代に数の茶器を信長から勲功の賞として貰^{もら}ったことを記している手紙を自分の知人が持っている。専門の史家の鑑定に拠^よれば疑うべくもないものだ。で、高慢税を払わせる発明者は秀吉ではなくて、信長の方が先輩であると考えらるのであるが、大にその税法を広行したのは秀吉である。秀吉の智謀威力で天下は大分明るくなり安ら became なった。東山以来の積勢で茶事は非常に盛んになった。茶道にも機運というものがなあるう、英霊底^{えいれいてい}の漢子^{かんし}が段に出て来た。松永弾正^{まつながだんじょう}でも織田信長でも、風流もなきにあらず、余裕もあつた人であるから、皆茶^{ちや}謙^{えん}を喜んだ。しかし大煽^{おおあお}りに煽つたのは秀吉であつた。奥州武士^{だてまさむね}の伊達政宗が罪を堂ヶ島^{どうしま}に待つ間にさえ茶事を学んだほど、茶事は

行われたのである。勿論もちろん秀吉はおたわら小田原陣にも茶道宗匠を随したがえていたほどである。南方外
 国や支那から、おもしろい器物を取寄せたり、また古渡こわたりの物、在来のもをも珍重したり
 して、おもしろい、味のあるものを大に尊おおいたつとんだ。骨董は非常の勢いきおいをもつて世に尊重され出
 した。勿論おもしろくないものや、味のないものや、平凡のものを持もて囃はやしたのではない。
 人をしてなるほどと首肯しゅこん點頭てんとうせしむるに足るだけの骨董を珍重したのである。食色の
 慾は限りがある、またそれは劣等の慾、牛や豚も通有する慾である。人間はそれだけでは
 済まぬ。食色の慾が足り、少しの閑暇があり、利益や権力の慾火は断たえず燃ゆるにしても
 それが世態漸ようやく安固あんこならんとする傾かたむきを示して来て、そうむやみに修羅心しゅらしんに任せて が寄
 つてたかつて競せり上げた。北野きたのの大茶おおちやの湯ゆなんて、馬鹿氣たことでもなく、不風流の事
 でもないか知らぬが、一方から観れば天下を茶の煙りに巻いて、大煽りに煽つたもので、
 高慢競争をさせたようなものだ。さてまた当時において秀吉の威光を背後に負いて、目眩まばゆ
 いほどに光り輝いたものは千利休せんのりきゅうであつた。勿論利休は不世出の英靈漢である。兵政
 の世界において秀吉が不世出の人であつたと同様に、趣味の世界においては先もつず以て最高
 位に立つべき不世出の人であつた。足利あしかが以来の趣味はこの人によつて水際立みずぎわだつて進歩
 させられたのである。その脳力も眼力も腕力も尋常一様の人ではない。利休以外にも英俊

は存在したが、少は差があつても、皆大体においては利休と相呼応し相追隨した人であつて、利休は衆星の中に月の如く輝き、群魚を率いる先頭魚となつて悠然としていたのである。秀吉が利休を寵用したのはさすが秀吉である。足利氏の時にも相阿弥その他の人、利休と同じような身分の人はあつても、利休ほどの人もなく、また利休が用いられたほどに用いられた人もなく、また利休ほどに一世の趣味を動かして向上進歩せしめた人もない。利休は実に天仙の才である。自分なぞはいわゆる茶の湯者流の儀礼などは塵ばかりも知らぬ者であるけれども、利休がわが邦の趣味の世界に与えた恩沢は今に至てな存して、自分らにも加被していることを感じているものである。かほどの利休を秀吉が用いたのは実にさすがに秀吉である。利休は当時において言わず語らずの間に高慢税査定者とされたのである。

利休が佳なりとした物を世人は佳なりとした。利休がおもしろいとし、貴しとした物を、世人はおもしろいとし、貴しとした。それは利休に一毫のウソもなくて、利休の佳とし、おもしろいとし、貴しとした物は、真に佳なるもの、真におもしろい物、真に貴い物であつたからである。利休の指点したものは、それが塊然たる一陶器であつても一度その指点を経るや金玉ただならざる物となつたのである。勿論利休を幫けて当時の趣味の世界を

進歩させた諸星の働きもあつたには相違ないが、一代の宗匠として利休は恐ろしき威力を有して、諸星を引率し、世間をして追隨させたのである。それは利休のウソのない、秀靈の趣味感から成立つたことで、何らその間にイヤな事もない、利休が佳とし面白しとし貴しとした物は、^{とこし}長えに真に佳であり面白くあり貴くある物であるのであるが、しかしまた一面には当時の最高有力者たる秀吉が利休を用い利休を尊み^{たつと}利休を殆んど神聖なるものとしたのが利休背後の大光は争つて利休の貴しとした物を貴しとした。これを得る喜悦、これを得る高慢のために高慢税を納めることを敢てしたのである、その高慢税の額は間接に皆利休の査定するところであつたのである。自身はそんな卑役^{ひやく}を取るつもりはなかつたろうが、自然の勢^{いきおい}で自分も知らぬ間に何時^{いつ}かそういう役廻りをさせられるようになっていたのである。骨董が黄金何枚何十枚、一郡一城、あるいは血みどろの悪戦の功労とも匹敵するようになった。換言すれば骨董は一種の不換紙幣のようなものになつたので、そしてその不換紙幣の発行者は利休という訳になつたようなものである。西郷^{さいこう}が出したり大隈^{おおくま}が出したりした不換紙幣は直に^{しき}価値が低くなつたが、利休の出した不換紙幣はその後何百年を経てなおその価値を保っている。さすがは秀吉はエライ人間をつかまえて不換紙幣発行者としたもので、そして利休はまたホントに無慾でしかも煉金術を真に^よ能くし

た神仙であつたのである。不換紙幣は当時どれほど世の中の調節に与^{あずか}つて靈力があつたか知れぬ。その利を受けた者は勿論利休ではない、秀吉であつた。秀吉は恐ろしい男で、神仙を駆使してわが用を為さしめたのである。さて祭りが済めば芻^{すうく}狗は不要だ。よい加減に不換紙幣が流通した時、不換紙幣発行は打切られ、利休は詰らぬ理屈を付けられて殺されて終^{しま}つた。後から後からと際限なく発行されるのではないから、不換紙幣は長くその価値を保つた。各大名や有福町人の蔵の中に収まりかえていた。考えて見れば黄金や宝石だつて人生に取つて真価値があるのではない、やはり一種の手形じやまでなのであらう。徹底して観ずれば骨董も黄金も宝石も兌換券も不換紙幣も似たり寄つたりで、承知されて通用すれば樹の葉が小判でも不思議はないのだ。骨董の佳^よい物おもしろい物の方が大判やダイヤモンドよりも佳くもあり面白くもあるから、金貨や兌換券で高慢税をウンと払つて、釉^{くすり}の工合の妙味言うべからざる茶碗なり茶^{ちや}入^{いれ}なり、何によらず見^み処^{どころ}のある骨董を、好きならば手にして楽しむ方が、暢^{ちやうたつ}達^つした料簡というものだ。理屈に沈む秋のさびしさ、よりも、理屈をぬけて春のおもしろ、の方が好きそうな訳だ。関西の大富豪で茶道好きだつた人が、死ぬ間際に数万金で一茶器を手に入れて、幾時間^{たのし}を楽んで死んでしまった。一時間が何千円に当つた訳だ、なぞと譏^{そし}る者があるが、それは譏^{そし}る方がケチな根性で、一生

理屈地獄でノタウチ廻るよりほかの能のない、理屈をぬけた楽しい天地のあることを知らぬからの論だ。趣味の前には百万両だつて煙草たばこの煙よりも果敢はかないものにしか思えぬことを会得しないからだ。

骨董はどう考えてもいろいろの意味で悪いものではない。特に年寄になつたり金持になつたりしたものには、骨董でも捻ひねくつてもらつてゐるのが何より好い。不老若返り藥などを年寄に用いてもらつて、若い者の邪魔をさせるなどは悪い洒落しやれだ。老人には老人相應のオモチャを当あてがつて、落おちつて隅の方で高慢の顔をさせて置く方が、天下泰平の御祈禱ごきとうになる。小供はセルロイドの玩器おもちゃを持つ、年寄は樂焼らくやきの玩器おもちゃを持つ、と小学讀本とくほんに書いて置いても差さしつかえ支さない位だ。また金持はとにかくに金が余つて氣の毒な運命に囚とらえられてゐるものだから、六朝りくちよう仏ぶつ印度いんど仏ぶつぐらいでは濟度とくどされない故、夏殷周かいんしゆうの頃の大古物だつぎ、姐己かなだらいの金い盃はいに狐の毛が三本着いてゐるのだの、伊尹いゐんの使つた料理鍋う、禹うの穿はいたカナカンジキだのというようなものを素敵に高く買わすべきで、これはこれ有無相通、世間の不公平を除き、社会主義者だの無産者だのというむずかしい神おかぐらの神慮たてまつをすずしめ奉る御神樂おかくらの一座にも相成る訳だ。

が、それはそれでよいとして、年寄でもなく、二才にさいでもなく、金持でもなく、文無しで

もない、いわゆる中年中産階級の者でも骨董を好かぬとは限らない。こういう連中は全く盲人めくらというでもなく、さればといつて高慢税を進んで沢山納め奉るほどの金も意気もないので、得て中え有ちゆううに迷つた亡者のようになる。ところが書画骨董に心を寄せたり手を出したりする者の大多数はこの連中で、仕方がないからこの連中の内で聡明でもあり善良でもある輩やからは、高級骨董の素晴らしい物に手を掛けたくない事はないが、それは雲に梯かけはしの及ばぬ恋路みたようなものだから、やはり自分らの身分相応の中流どころの骨董で楽しむことになる。一番聡明善良なるものは分科的専門的にして、自分の関係しようとする範圍をなるべく狭小にし、そして歳月をその中で楽しむ。いわゆる一筋を通し、一流れを守つて、画えなら画で何派の誰を中心にしたところとか、陶器なら陶器で何窯なにがまの何時頃とか、書なら書で儒者の誰とか、蒔絵まきえなら蒔絵で極古ごくこいところとか近いところとか、というような心を寄せ手を掛ける。この「筋の通つた蒐集研究をする」これは最も賢明で本当の仕方であるから、相応に月謝さえ払えば立派に眼も明き味も解つて来て、間ま違ちがひなく、最も無難みずせに清娛せいごを得る訳だから論はない。しかるにまた大多数の人 はそれでは律義過ぎて面白くないから、コケが東西南北の水みず転てんにあたるように、雪せつ舟しゅうくさいものにも眼を遣やれば応おう拳きよくさいものにも手を出す、歌麿うたまろがかつたものにも色気を出す、大雅堂たいがどうや竹田ちくでん

ばたけにも鍬くわを入れたがる、運が好ければ韓幹かんかんの馬でも百円位で買おう気でおり、支那
 の笑話しょうわにある通り、杜荀鶴とじゆんかくの鶴の画なんという変なものをも買わぬと限らぬ勢いきおいで、そ
 れでも画のみならまだしもの事、彫刻でも漆器でも陶器でも武器でも茶器でもというよう
 に気が多い。そういう人は甚だはなは少くないが、時に気の毒な目を見るのもそういう人 で、
 悪気はなくとも少し慾気よくけが手伝っていると、百貨店で品物を買ったような訳ではない目に
 も自業自得で出会うのである。中には些性ちしようが悪くて、骨董商の鼻毛を抜いていわゆる掘ほりだ
 出物しものをする気になつてゐる者もある。骨董商はちよつと取片とりかたづ付けて澄ましているもの
 だが、それだつて何も慈善事業で店を開いてゐる訳ではない、その道に年期を入れて資本
 を入れて、それで妻子を過すこしているのだから、三十円のもの、五十円のもの、口銭こうせんや経費に二十円遣やつ
 て五十円で買うつもりでいれば何の間違まちがひはないものを、五十円のを三十円で買う気
 になつてゐては世の中がスラリとは行かない。五円のを三十円で売附けられるような
 ことも、罷り間違まかえば出来ることになる道理だ。それを弥いやが上にもアコギな掘出しぎ気で、
 三円五十銭で乾山けんざんの皿を買おうなんぞという図 《ずうずう》しい料簡を腹の底に持つ
 ていたとて、何の、乾也けんやだつて手に入る訳はありはしない。勸業債券は一枚買つて千円も
 二千円になる事はあつても、掘出しなんということは先まず以てなかるべきことだ。悪あくし

性の料簡だ、劣等の心得だ、そして暗愚の意図というものだ。しかるに骨董いじりをすると、骨董には必ずどれほどの価があり金銭觀念が伴うので、知らず識らずに賤しくなかつた人も掘出し気になる気味のあるものである。これは骨董のイヤな箇条の一つになる。掘出し物という言葉は元来が忌わしい言葉で、最初は土中冢中などから掘出した物ということに違いない。悪い奴が棒一本か鋏一挺で、墓など掘って結構なものを得る、それが既ち掘出物で、怪しからぬ次第だ。伐墓という言葉は支那には古い言葉で、昔から無法者が貴人などの墓を掘つた。今存している三略は張良の墓を掘つて彼が黄石こうせき公から頂戴したものをアップしたという伝説だが、三略はそうして世に出たものではない。全く偽物だ。しかし古い立派な人の墓を掘ることは行われた事で、明の天子の墓を悪僧が掘つて種の貴い物を奪い、おまけに骸骨を足蹴にしたので罰が当つて脚疾になり、その事遂に発覚するに至つた読むさえ忌わしい談は雑書に見えている。発掘さるるを厭つて曹操は多くの偽塚を造つて置いたなどということは、近頃の考証でそうではないと分明したが、王安石などさえ偽塚の伝説を信じて詩を作つたりしていたところを見ると、伐墓の事は随分めずらしいことでなかつたことが思われる。支那の古俗では、身分のある死者の口中には玉を含ませて葬ることもあるのだから、酷い奴は冢中の宝物から、

骸骨の口の中の玉まで引^{ひつ}ぱり出して奪^あうことも敢^あてしようとしたこともある。飛んで
 もないことをする者があつて、先年西の方の某国で或る貴^{えい}い塋^{えい}域^きを犯した事件というの
 が伝えられた。聞くさえ忌^いわしいことだが、掘出し物という語は無論こういう事に本^{もと}づい
 て出来た語だから、いやしくも普通人的感情を有している者の使うべきでも思^{おも}うべきでも
 ない語であり事である。それにも関^{かん}わらず掘出し物根性の者が多く、蚤^{のみと}取り^{まなこ}眼、熊鷹^{くまたかめ}目
 で、内心大掘出しをしたがつている。人が少し悪い代りに虫^{おおい}が大^{はなし}に好^よい談である。そうい
 う人間が多いから商売が險悪になつて、西の方で出来たイカサマ物を東の方の田舎^うへ埋^う
 て置いて、掘出し党に好^よい掘出しをしたつもりで悦^{よろこ}ばせて、そして釣^{つり}鉤^{はり}へ引^ひ掛^かけるなど
 という者も出て来る。京都出^で来^きのもの^きを朝鮮へ埋^うめて置いて、掘出させた顔で、チャンと
 釣^つるなぞというケレン商売も始まるのである。もし真に掘出しをする者があれば、それは
 無^ぶ頼^{らい}滄^{そう}皮^{はつ}の徒^つでなければならぬ。またその掘出物を安く買^かつて高く売^うり、その間^{かん}に利を得
 る者があれば、それは即ち營業税を払^はつてゐる商売人でなければならぬ。商売人は年^{とし}期^きを
 入^いれ資本を入^いれ、海千山千の苦^く勞^{らう}を積^たんでゐるのである。毎日 真劍勝負をするような
 氣になつて、良い物、悪い物、二番手、三番手、いづれ結構^{じょうこう}上^{じょう}の物は少^{すく}い世の中に、
 一眼見^み損^そえ^なば痛^{いた}手を負^おわねばならぬ瀬に立^たつて、いろいろさまざまあらゆる骨董相^{ぼんどうさう}應^{おう}の

値ぶみを間違わず付けて、そして何がしかの口錢を得ようとするのが商売の正しい心こころである。どうして油断すきも隙すきもなりはしない。波の中に舟を操っているようなものである。波瀾はらん重疊じようじようがこの商買の常である。そこへ素人しろうとが割込んだとて何が出来よう。今この波瀾重疊じようじよう危険な骨董世界の有様を想見そうけんするに足りる談はなしをちよつと示そう。但しいずれも自分が仮設かせつしたのでない、出処しゅつしよはあるのである。いわゆる「出」は判然はつきりしているので、御所望ならば御明かし申して宜よろしいのです。ハハハ。

これは二百年近く古い書に見えている談はなしである。京都は堀川ほりかわに金八きんぱちという聞えた道具屋があつた。この金八が若い時の事で、親父にも仕込まれ、自分も心の励みの功を積んだので、大分に眼が利いて来て、自分ではもう内《ないない》、仲間の者にもヒケは取らない、立派な一人前の男になつたつもりでいる。實際また何から何までに渡つて、随分に目も届けば氣も働いて、もう親父から店を譲られても、取りしきつて一人で遣やつて行かれるほどになつていたのである。しかし何家どこの老人としよりも同じ事で、親父はその老成の大事取りの心から、かつはあり余る親切の氣味から、まだまだ位に思つていた事であろう、依然として金八の背後うしろに立つて保護ふかくさしていた。

金八が或時大阪おおさかへ下くだつた。その途中深草ふかくさを通ると、道に一軒の古道具屋があつた。

そこは商買の事で、ちよつと一眼見渡すと、時代蒔絵じだいまきえの結構な鍍あぶみがチラリと眼についた。ハテ好い鍍だナ、と立留つて視ると、如何にも時代といい、出来といい、なかなかめつたにはない好いものだが、残念なことには一方しかなかった。揃つていれば、勿論こんな店にあるべきものではないはずだが、それにしても何程いくらというだろうと、価あたいを聞くと、ほんの端はした金がねだった。アア、一対いっついなら、おれの腕で売れば慥たしかに三十両にはなるものだが、片方では仕方がない、少しの金にせよ売物にならぬものを買つたつてどうもならぬと、何ともいえないその鍍の好い味に心は惹ひかれながら、振返つては見つとも思い捨てて買わずに大阪へと下つた。いくら好い物でも商売にならぬものを買わなかつたところはさすがに宜かつた。ところが、それから道の程を経て、京橋辺きょうばしへんの道具屋に行くと、偶然といおうか天の引合せといおうか、たしかに前の鍍と同じ鍍が片方あつた。ン、これが別れ別れて両方後家ごけになつていたのだナ、しめた、これを買つて、深草のを買つて、両方合わせれば三十両、と早くも腹の中で笑えみを含んで、価を問うと片方の割合には高いことをいつて、これほどの物は片方にせよ稀有けうのものだからと、なかなか廉やすくない。仕方がないから割に高いけれども、腹の中に目的があるので、先方のいい値ねで買つて、わが家へ帰ると直すぐにこの話をした、勿論親父に悦ばれるつもりであつた。すると親父は悦ぶどころか大怒おおおこりで、

「たわけづらめ、慾に気が急せいて、鐙の左右にも心を附けずに買いおったナ」と罵ののされた。金八も馬鹿じゃなかった。ハツと気が付いて、「しまった。向きようこう後あだな氣をつけます、御免なさいまし」と叩頭おしぎしたが、それから「片かた鐙あぶみの金八」という渾名あだなを付けられたということである。これは、もとより片方しかなかった鐙を、深草で値を付けさせて置いて、捷ち徑かみちのまわり道をして同じその鐙を京橋の他の店へ埋めて置いて金八に掘出させたのだ。心さえ急かねば謀はかられる訳はないが、他人にして遣やられぬ前にというのと、なまじ前に熟じ視しして、テツキリ同じ物だと思つた心の虚きよというものの二ツから、金八ほどの者も右左を調べることを忘れて、一盃いっぱい食くわされたのである。親父はさすがに老功で、後家の鐙を買かい合あわせて大きい利を得る、そんな甘うまい事があるものではないというところに勘かんを付けて、直すぐに右左の調べに及ばなかったナと、紙燭ししよくをさし出して慾心の黒闇くろやみを破つたところは親父だけあつたのである。勿論深草を尋ねても鐙はなくて、片鐙の浮名うきなだけが金八の利得になつたのである。昔と今とは違ちがうが、今だつて信州と名古屋とか、東京と北京ペキンとかの間でこの手で謀られたなら、慾氣満《よくけまんまん》の者は一服いっぷく頂戴せぬとは限るまい。片鐙の金八はちよつとおもしろい談はなしだ。

も一ツ古い談はなしをしようか、これは明末みんまつの人の雜筆に出ているので、その大分に複雑で、

そしてその談中に出て来る骨董好きの人や骨董屋の種の性格一風には名高い人もあり、勿論虚構の談ではないと考えられるのである。

定窯ていようといえは少し骨董好きの人なら誰でも知っている貴い陶器だ。宋そうの時代に定州ていしゅうで出来たものだから定窯というのである。詳しく言えばその中にも南定なんていと北定ほくていとあつて、南定というのは宋きんが金おに逐なんわられて南渡なんとしてからのもので、勿論その前の北宋ほくそうの時、美術天子の徽宗皇帝きその政和宣和頃せいわけん、即ち西暦千百年頃から二十何年頃までの間に出来た北定の方が貴いのである。また、新定しんていというものがあるが、それは下くだつて元の頃げんに出来たもので、ほんとの定窯ではない。北定の本色は白で、白の※水ゆうすいの加わった工合に、何ともいえぬ面白い味が出て、さほどに大したものでなくてさえ人を引付ける。

ところが、ここに一つの定窯の宝鼎ほうていがあつた。それは鼎かなえのことであるからけだし當時宮庭へでも納めたものであつたらう、精中の精、美中の美で、実に驚くべき神品であつた。はじめ明の成化弘治せいしかこうじの頃、朱陽しゅようの孫氏そんしが曲水山房きよくすいさんぼうに蔵していた。曲水山房主人孫氏は大富豪で、そして風雅人鑑賞家として知られた孫七峯そんしちほうとつづき合あいで、七峯は當時の名士であつた楊文襄ようぶんじやう、文太史ぶんたいし、祝京兆しゅくけいちょう、唐解元とうかいげん、李西涯等りせいがいと朋友ともだちで、七峯のいたところの南山なんざんで、正徳十五年七峯が蘭亭らんていの古のように修禊しゅうけいの会をした

時は、唐六如とうりくじよが図をつくり、兼ねて長歌を題した位で、孫氏は単に大富豪だったばかりでなかったのである。そこでその定窯の鼎の台座には、友人だった李西涯が篆書てんしよで銘を書いて、鐫りつけた。李西涯の銘だけでも、今日は勿論の事、当時でも珍重したものであつたろう。そういうスバらしい鼎だったのである。

ところが嘉靖年間かせいに倭寇わこうに荒されて、大富豪だけに孫氏は種の点で損害を蒙つて、次第に家運が傾いた。で、蓄えていたところの珍貴な品を段と手放すようになった。鼎は遂に京口けいこうの《しゅうこうさくさく》としていい伝え聞伝えて羨涎せんせんを垂れるところのものであつた。

ここに呉門ごもんの周丹泉しゅうたんせんという人があつた。心慧思靈しんけいしれいの非常の英物で、美術骨董にかけては先ず天才的の眼も手も有していた人であつたが、或時金きんしやうから舟に乗り、江右かうゆうに往く、道に毘陵びりやうを経て、唐太常に拝謁を請い、そして天下有名の彼の定鼎の一覽もとを需めた。丹泉の俗物でないことを知つて交つていた唐氏は喜んで引見して、そしてその需に応じた。丹泉はしきりに称讃してその鼎をためつすがめつ熟視し、手をもつて大さおおさ度はかつたり、ふところ紙に鼎の紋様を模したりして、こういう奇品に面した眼福がんぷくを喜び謝したりして帰つた。そしてまた舟を出して自分の旅路に上つてしまった。

それから半はん歳とし余り経た頃、また周丹泉が唐太常をおとずれた。そして丹泉は意気安閑として、過ぐる日の礼を述べた後、「御秘藏のと同じような白定鼎をそれがしも手に入れました」といった。唐太常は吃驚びっくりした。天下一品と誇っていたものが他所よそにもあつたというのだからである。で、「それならばその品を視せて下さい」というと、丹泉は携えて来ていたのであるから、異議なく視せた。唐は手に取って視ると、大きさから、重さから、骨質から、釉ゆう色しよくの工合から、全くわが家のものと寸分違たがわなかつた。そこで早速自分の所有みくらのを出して見競べて視ると、兄弟か 《りようりよう》と会得あざむしました。そこで実は倣ならつてこれを造りましたので、あり体ていに申します、貴台を欺くようなことは致しませぬ」といった。丹泉は元来毎つねづね 江西こうせいの景德鎮へ行つては、古代の窯器の佳品の模製を良工に指図しては作らせて、そしていわゆる掘出し好きや、比較的低い錢で高い物を買おうとする慾張りや、訳も分らぬくせに金錢かんばんずくで貴い物を得ようとする耳食じしよく者流しやりゆうの目をまわさせていたもので、その製作は款紋かんもん色沢しきたく、すべて咄 《とつとつ》として真に逼せまつたものであつたのである。恐ろしい人もあつたもので、明の頃に既にこういう人があつたのであるから、今日でもこの人の造らせた模品が北定窯だの何だのといって何処どこかの家に什襲じゆうしゆう珍蔵ちんざうされていぬとは限るまい。さて、周の談はなしを聞いて太常はまた今更に歎服

した。で、「それならばこの新鼎は自分に御譲りを願う、真品と共に秘蔵して永く副品としますから」というので、四十金を贈ったということである。無論丹泉はその後また同じ品を造りはしなかつたのであろう。

この談^{はなし}だけでもかなり骨董好きは教えられるところがあるが、談はまだ続くのである。それから年月を経て、万曆^{まんれき}の末年頃、淮安^{わいあん}に杜九如^{ときゅうじょ}というものがあつた。これは商人で、大身上^{だいしんしょう}で、素敵な物を買出すので名を得ていた。千金を惜^{おし}まずして奇玩^{きがん}をこれ^{あがな}購^{かう}うので、董元宰^{とうげんさい}の旧蔵の漢玉^{かんぎよく}章^{しょう}、劉海日^{りゅうかいじつ}の旧蔵の商金鼎^{しょうきんてい}なんともいうものも、皆杜九如の手に落ちた位である。この杜九如が唐太常の家にある定鼎の噂を聞いていて、かねがねどうかして手に入れたいものだ^{うかが}と覗^{うかが}つていた。太常の家は孫の代になって、君俞^{くんゆ}というものが当主であつた。君俞は名家に生れて、氣位^{きぐらい}も高く、かつ豪華で交際を好む人であつたので、九如は大金を齎^{もた}らして君俞のために寿^{じゆ}を為し、是非ともどうか名高い定鼎を拝見して、生平^{せいへい}の渴望を慰^{なぐさ}めたいと申^{もうし}出した。君俞は金で面^かを撲^つるような九如を余り好みもせず、かつ自分の家柄からして下眼に視たことでもあろう、ウン御覽に入れましようといつて半分冗談に、真鼎は深蔵したまま、彼の周丹泉^かが倣造^{ほうぞう}した副の方^がの贗鼎^{がんでい}を出して視せた。贗鼎だつて、最初真鼎の持主の凝菴が歎服した位のもものではあ

り、まして真鼎を目にしたことはない九如であるから、贗物と悟ろうようはない、すっかりその高雅妙巧の威に撲たれて終つて、堪らない佳い物だと思ひ込んで惚れ惚れした。そこで無理やりに千金を押付て、別に二百金を中間に立つて取做してくれる人に酬い、そして贗鼎を豪奪するようにして去つた。巧偷豪奪という語は、宋の頃から既に数《しばしば》見える語で、骨董好きの人には豪奪ということも自然と起らざるを得ぬことである。マアそれも恕すべきこととすれば恕すべきことである。

しかし君愈の方では困ることであつた。何故といへば持つて行かれたのが真物ではないからである。君愈は最初は氣位の高いところから、町人の腹ツぶくれなんぞ何だという位のことで贗物を真顔で視せたのであるが、元来が人の悪い人でも何でもなく温厚の人なので、欺いたようになつたまま済ませて置くことは出来ぬと思つた。そこで門下の士を遣つて、九如に告げさせた。「君が取つて行つたものは実は贗鼎である。真の定鼎はまだ此方に蔵してあるので、それは太常公の戒に遵つて輕《かろ》ろしく人に示さぬことになつてゐるから御視せ申さなかつたのである。しかるに君が既に千金を捐てて贗品を有つてゐるということになると、君は知らなくても自分は心に愧じぬという訳にはゆかぬではないか。どうかあの鼎を還して下さい、千金は無論御返しするから」と理解させたので

ある。ところが世間に得てあるところの例で、品物を売る前には金^{かね}が貴く思えて品物を手放すが、品物を手放してしまうとその物のないのが淋しくなり、それに未練が出て取返したくなるものである。杜九如の方ではテッキリそれだと思つたから、贗物だつたなぞというのは口実だと考えて、約束変^{へん}改^{かい}をしたのが本心だと見た。そこで、「どういたしまして。あの様な贗物があるものではございますまい。仮令^{たと}贗物にしましたところで、手前の方では結構でございます、頂戴致して置きまして後悔はございません」とやり返した。「そんなにこちらの言葉を御信用がないならば、二つの鼎を列^{なら}べて御覧になったら如何^{いか}です」と一方はいつたが、それでも一方は信疑^{あいなかば}相^あ半^{はん}して、「当方はどうしても頂戴して置きます」と意地張^{いじば}つた。そこで唐君^あ兪^いは遂に真鼎を出して、贗鼎に比べて視せた。双方とも立派なものではあるが、比べて視ると、神彩^{しんさい}靈威^{れいゐ}、もとより真物は世間に二ツとあるべきでないところを見わした。しかし杜九如も前言の手前^{どう}、如何^{どう}ともしようとはいわなかった。つまり模品^{もひん}だということを承知しただけに止^{とど}まって、返しはしなかった。九如のその時の心の中は傍^{うち}からはなかなか面白く感ぜられるが、当人に取つては随分変なものであつたろう。しかしこの委曲を世間が知ろうはずはない、九如の家には千金に易^かえた宝鼎が伝わつたのである。九如は老死して、その子がこれを伝えて有^もつていた。

王廷瑒字は越石おうていゝあぎな えつせきという者があつた。これは片かた鐙あぶみを金八に売りつけたような性質の良くない骨董屋であつた。この男が杜九如の家に大した定鼎のあることを知つていた。九如の子は放蕩ものであつたので、花柳かりゆうの巷ちまたに大金を捨てて、家も段に悪くなつた。そこへ付つけ込んで廷瑒は杜生とせいに八百金を提供して、そして「御返金にならない場合でも御宅ようていの窯鼎ようていさえ御渡し下されば」ということをいつて置いた。杜生はお坊さんで、廷瑒はかの謀はかつた通りになり、鼎は廷瑒の手に落ちてしまった。廷瑒は大喜びで、天下一品、価値万ばんき金きんなどど大法螺おほほらを吹立ふきたて、かねて好事こうずで鳴っている徐六岳じよりくがくという大紳たいしんに売付けにかかつた。徐六岳を最初から廷瑒は好い鳥だと狙つていたのであろう。ところが徐はあまり廷瑒が狡譎こうきつなのを悪にくんで、横を向いてしまった。廷瑒はアテがはずれて困つたが仕方あがなかつた。もとよりヤリクリをして、狡こす辛からく世を送つてゐるものだから、嵌はめ込む目め的てがない時は質しちに入れたり、色氣の見える客が出た時は急に質受けしたり、十余年の間というものは、まるで碁ごを打つようなカラクリをしていたその間に、同じような族類系統の肖にたものをいろいろ求めて、どうかして甘い汁あまを啜すろうとしていた。その中うちに泰興たいこうの季き因いん是ぜという、相当の位地のある者が廷瑒に引ひかつた。

季因是もかねて唐家の定窯鼎の事を耳にしていた。勿論見た事もなければ、詳しい談はなしを

聞いていたのでもない。ただその名に憧れて、大した名物だということを知っていたに過ぎない。廷瑯は因是の甘いお客だということを見抜いて、「これがその宝器でございまして、これこれの訳で出たものでございます」と宜い加減な伝来のいきさつを談して、一つの窯鼎を売りつけた。それも自分が杜生から得た物を売ったのならまだしもであつて、贗鼎にせよ周丹泉の立派な模品であるから宜いが、似ても似つかぬ物で、しかも形さえ異つている方鼎であつた。しかし季因是はまるで知らなかったのだから、廷瑯の言に瞞着されて、大名物を得る悦びに五百金という高慢税を払つて、大ニコニコでいた。

しかるに毘陵の趙再思という者が、偶然泰興を過ぎたので、知合であつたから季因是の家をおとずれた。毘陵は即ち唐家のあるところの地で、同じ毘陵の者であるから、趙再思も唐家に遊んだこともあつて、彼の大名物の定鼎を見たこともあつたのである。その毘陵の人が来たので、季因是は^{おおてんぐ}大天狗で、「近ごろ大した物を手に入れましたが、それは乃ち^{すなわ}唐氏の旧蔵の名物で、わざとにも御評鑑^{ごひようかん}を得たいと思つておりましたところを、丁度^{ちやうど}御光来を得ましたのは誠に仕合せで」という談だ。趙再思はただハイハイといつていると、季は重ねて、「唐家の定窯の方鼎は、君もかつて御覧になったことが御有りですか」といった。そこで趙は堪えかねて笑い出して、「何と仰あります、唐氏の定鼎は方鼎

ではございませぬ、えんてい円鼎で、足は三つで、方鼎と仰おつしあるが、それは何で」と答えた。季因是はこれを聴くと、ふつぜん怫然として奥へ入つてしまつて久しく出て来なかつた。趙再思は仕方なしに俟まつてしていると、くれがた暮方になつて漸ようやく季は出て来て、余怒よどなお色にあるばかりで、「自分に方鼎を売付けた王廷瑤という奴めは人を馬鹿にした憎い奴、南科なんかの屈静源くつせいげんは自分が取立てたのですから、今書面を静源に遣つかわしました。静源は自分のためにこの一埒いちらつを明けてくれましよう」ということであつた。果して屈静源は有司ゆうしに属して追理ついりしようとしたから、王廷瑤は大きくじりで、一目散に姿を匿かくしてしまつて、人をたのんで託わびを入れ、別に偽物などを贈つて、やつと牢獄ろうやへ打込まれるのを免まぬかれた。

はなし談はこれだけで済んでも、かなり可笑味おかしみもあり憎味もあつて沢山なのであるが、まだ続くからいよいよ変なものだ。廷瑤の知合に黄石こうこうせき、名は正賓せいひんというものがあつた。廷瑤と同じ徽州きしゅうのもので、親類つづきなどいつていたが、この男は摺紳しんしんの間にも遊び、少しは鼎彝書画の類をも蓄え、また少しは眼もあつて、本業というのではないが、半黒はんくろ人で売つたり買つたりもしようという男だ。こういう男は随分世間にもあるもので、雅がのように俗で、俗のように物好ものずきでもあつて、愚のようで伶俐りこうで、伶俐りこうのようで畢竟ひつきようは愚のようでもある。不才の才子である。この正賓はいつも廷瑤と互たがいに所有の骨董を取易とりか

えごとをしたり、売買うりかいの世話をしたりさせたりして、そして面白がつていた。この男が自分の倪雲林げいうんりんの山水一幅さんすいぶく、すばらしい上出来なのを廷瑤に託して売ってもらおうとしていた。価は百二十金で、ちよつとはないほどのものだった。で、廷瑤の手へ託しては置いたが、金高かねだかものでもあり、口が遠くて長くなる間に、どんな事が起らぬとも限らぬと思つたので、そこでなかなかウツカリしておらぬ男なので、その幅の知れないところへ予じめ自分の花押かおうを記して置いて、勿論廷瑤にもその事は秘しておつたのである。廷瑤はその雲林を見ると素敵に好いので、欲しくなつて堪たまらなかつた。で、上手じようずな贗筆べいげんかきに頼んで、すっかりその通りの模本もほんをこしらえさせた。正竇が取返しに來た時、米元章まいげんしょうりゆの巧偷かうとうをやらかして、本もほんの方を渡して知らん顔をきめようというのであつた。ところが先方にも荒神様こうじんさまが付いていない訳ではなくて、チャント隠し印じるしのあることには気が付かなかつたのである。こういうイキサツだから何時いつまで経たつても売れない。そこで正竇は召使の男を遣やつて、雲林を取返して來いといい付けた。隠し印のことは無論男に吞込みせたのである。この男の王仏元おうぶつげんというのも、平常主人いつもらの五分ごぶもすかさないとところを見聞ききして知つていたので、なかなか賢くなつてゐる奴だった。で、仏元は廷瑤のところへ往つて、雲林を返して下さいというと、廷瑤は承知して一幅を返した。一幅は何も彼かも異ことな

てはいなかった。しかし仏元は隠しじるしのあり処^{どころ}についてその有無を査^{しら}べた。不思議や主人の花押は影も形もなかった。ないはずである、廷瑄が今渡したものは正^{まさ}しく品なのであるもの。

仏元はさてこそと腹の中でニヤリと笑った。ところでこの男がまた真剣白刃^{しらはど}取りを奉^{ほう}書の紙一枚で遣^{やり}付けようという男だったから、これは怪しからん、模本贋物を御渡しになるとは、と真正面からこちらの理屈の木刀を揮^{ふる}つて先方の毒悪の真剣と切結ぶような不利なことをする者ではなかった。何でもない顔をして模本の雲林を受取った。敵の真剣を受留めはしないで、澄まして体^{たい}を交^かわして危^{あぶな}気のないところに身を置いたのである。そしてこういうことを言った。「主人はただ私^{わたくし}に面を頂戴して参れとばかりではなく、こちらの定窯鼎をお預かり致してまいれ、御直段^{おねだん}の事はいずれ御相談致しますということ」といった。定鼎の売れ口がありそうな談^{はなし}である。そこで廷瑄は悦んで例の鼎を出して仏元に渡した。廷瑄は仏元に、より長い真剣を渡して終^{しま}つたのである。

そこへ正寶は遣^やつて来た。そして画を検査してから、「售^うれないなら售れないで、原物を返してくれるべきに、狡^{こす}いことをしては困る」というと、「飛んでもない、正しくこれは原物で」と廷瑄はいい張る。「イヤ、そうは脱けさせない。自分は隠しじるしをして置

いた、それが今何処にある。ソナ甘い手（あま）を食わせられる自分じゃない」という。「そりやいい掛り（が）というもので、原物を返せば論はないはずだ」という。双方負けず劣らず遭合（や）あつて、チャンチャンバラと闘ったが、仏元は左右の指を鼎の耳へかけて、この鼎を還すまじいさまをしていた。論に勝つても鼎を取られては詰らぬと気のついた廷瑯は、スキを見て鼎を奪（うば）取ろうとしたが、耳をしつかり持っていたのだったから、巧くは奪えなかった。耳は折れる、鼎は地に墜（お）ちる。カチャンという音一ツで、千万金にも思っていたものは粉碎してしまった。ハツと思うと憤恨一時に爆裂した廷瑯は、夢中になって当面の敵の正賓にウンと頭撞（づ）きを食わせた。正賓は肋（あ）を傷けられて卒倒し、一場（いちじやう）は無茶苦茶になった。

元来正賓は近年逆境（ふに）におり、かつまた不如意で、惜しい雲林さえ放そうとしていた位のところへ、廷瑯の侮（あな）に遭い、物は取上げられ、肋は傷けられたので、鬱（うつ）悶（もん）苦痛一時に逼（せま）り、越（え）夕（せき）して終（つい）に死んでしまった。廷瑯も人命沙汰（ぎ）になったので土地にはいられないから、出発して跡を杭（こう）州（しゅう）にくらしました。周丹泉の造った模品はこれで土に返った訳である。

談（はなし）はもうこれで沢山であるのに、まだ続くから罪が深い。廷瑯が前に定窯の鼎類数種を

蒐^{あつ}めた中に、なお唐氏旧蔵の定鼎と号して大名物を以て人を欺^{あざむ}くべきものがあつた。廷瑀は杭州に逃げたところ、当時潞王^{ろおう}が杭州に寓^{ぐう}しておられた。廷瑀は潞王の承奉^{しょうほう}兪啓雲^{ゆけいうん}という者に遇つて、贗鼎を出して示して、これが唐氏旧蔵の大名物と誇耀^{こやう}した。そして潞王に手引^{てびき}してもらつて、手取り千六百元、四百金を承奉に贈ることにして、二千金で売付けた。時はもう明末にかかり、万事不束^{ふつつか}で、人も満足なものもなかったので、一厨^{いちちゆうや}役^くの少し鹿^{そろ}麇^{ひとあし}なものにその鼎を蔵した管^{かん} 龠^{やく}を扱^あわせたので、その男があやまつてその贗鼎の一足を折つてしまった。で、その男は罪を懼^{おそ}れて身を投げて死んで終つた。その頃大兵が杭州に入り來たつて、潞王は奔^{はし}り、承奉は廢^{はい}鼎を錢塘江に沈めてしまったといふ。

これでこの一条の談^{はなし}は終りであるが、骨董というものに附随して随分種の現象が見られることは、ひとりこの談のみの事ではあるまい。骨董は好い、骨董はおもしろい。ただし願^{たい}わくはスラリと大^{たい}枚^{まい}な高慢税を出して樂^{たの}みたい。廷瑀や正賓のような者に誰しも関係したくは思ふまい。それからまた、いくら詰らぬ人にだつて、鼎の足を折つたために身を投げてもらつたりなぞしたくはあるまい。

(大正十五年十一月)

青空文庫情報

底本：「幻談・観面談 他三篇」岩波文庫、岩波書店

1990（平成2）年11月16日第1刷発行

1994（平成6）年5月15日第6刷発行

底本の親本：「露伴全集 第六卷」岩波書店

1953（昭和28）年12月刊

入力：土屋隆

校正：オーシャンズ3

2008年1月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

骨董

幸田露伴

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>